

[Hello from LONDON No.6] 2016年2月10日

皆様、こんにちは。マイスターの鈴木真紀です。

長らくご無沙汰しておりますが、皆様お元気でいらっしゃいますか？

暦の上ではもう春ですが、寒いですね。この冬、日本は厳しい寒さが続いたようですね。英国は、どちらかというと暖冬です。1月に一度だけ家の周りが銀世界になりましたが、例年と比べると楽です。例年よりも早く水仙が咲き始め、風景に色が付き始めています。ロンドンは、北緯51度。サハリンの真ん中あたりと同緯度ですので、「寒い」というイメージがあるかと思いますが、雪が降るのは、東京や大阪と同じ程度の頻度ですし、氷点下になることも滅多にありません。「メキシコ暖流」というあたたかい海流のおかげです。メキシコ暖流は、一年を通して水温が5～10度しか変化しないので、地上の気温に反映されるのは、せいぜい10～15度です。つまり、夏は涼しく冬は寒くない「海洋性気候」です。スコットランドの北に位置するオークニー諸島でさえも、想像するほど寒くはありません。

(『オークニー諸島の新石器時代遺跡中心地』については「Hello from London No.4」をご覧ください)

先週末は旧正月(春慶節)でしたね。私は、「年女」です。「苦が去る」ということで、申の年は良い年だそうです。運の方に去られてしまわないように、気を付けたいものです。日光東照宮の「見ざる、言わざる、聞かざる」は、上手に年を重ねて行くのには、とても良い教訓だと心得て、努力目標のひとつに掲げているところです。

さて、昨年(2015年)の第39回世界遺産委員会において、日本の新しい世界遺産『明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼・造船・石炭産業』が登録されましたね。2011年以来5年連続で新しい世界遺産が誕生しているのですから、快挙と言えますよね。ただ、今年の登録を目指していた『長崎の教会群とキリスト教関連遺産』に関しては、イコモスの中間報告を受けて、政府がユネスコへの推薦を取り下げることが濃厚になってしまったようですね。今年からイコモスの「密室審査」を見直し、事前審査において申請国も出席して意見交換を行なうという制度に改定され、それが即、長崎の遺産に適用された形となりました。しかし、遺産としての価値は普遍的ですから、時間をかけてでも着実に登録へ向かって行くことが望ましいことだと思います。関係各位のご苦勞は察するに余りありますが、皆で、引き続き応援して行きましょう！

昨年は、ここ英国でも新しい世界遺産が誕生したことをご存知でしょうか？ 『フォース鉄道橋』です。英国においては、2009年にウェールズの『Pont・カサステ水路橋と運河』が登録されて以来、6年ぶりの新しい世界遺産誕生です。日本では、2年連続の産業遺産でもあり、産業遺産への認知度も上がっていると思います。英国においては、今回の『フォース鉄道橋』を含めて8件の産業遺産があり、世界でもっとも産業遺産の件数が多い国となっています。さすが、世界初の産業革命が起きた国だけのことはありますね。

世界遺産委員会がドイツのボンで開催されていた頃、私はエディンバラから湖水地方、コッツウォルズなどの周遊ツアーの仕事で、ロンドンを離れていました。『フォース鉄道橋』についての報道の仕方は大変

興味深いものでした。スコットランド国内やスコットランドとの国境に近い湖水地方においては、「スコットランドで第6番目の世界遺産が誕生」という表現だったのに対して、7月5日にコッツウォルズのブロードウェイのホテルで見た登録決定のニュースでは、キャスターが「英国で第29件目の世界遺産誕生」と、言うておりました。ご存知のように、2014年の秋、スコットランドは独立問題で揺れていました。国民投票の結果は、僅差で「独立しない」と決定されましたが、様々な点において、スコットランドは英国内の他の3カ国と一線を画しています。例えば、ナショナル・トラスト。自然や歴史的建造物の保護の為に設立された、民間の非営利団体であるナショナル・トラストは、スコットランドにおいては、別の組織を構えています。また、スコットランドにおいては、イングランドとは別の紙幣を発行する銀行が二行あって、イングランド銀行発行の紙幣同様に流通しています。スコットランドの紙幣は、イングランドでも通用しますが、日本へ持ち帰って再両替することはできないそうですので、滞在中に残さず使う必要があります。独立はしなかったものの、「独立精神」は、今も昔も旺盛ということの表れと言えるでしょう。

そんなスコットランドの紙幣に、『フォース鉄道橋』の絵が載っているのですよ！

Bank of Scotland 発行の 20 ポンド札です。

写真をご覧ください。

お札の右上に3人の男性が手をつないでいるのが
ご覧になれますでしょうか？

数字ゼロの中には、日本人技師の渡邊嘉一の姿が
見られます。渡邊嘉一は、グラスゴー大学を卒業した
エンジニアで、日本土木史の父とも呼ばれている
人物です。長野県の宇治橋家に生まれましたが、
渡邊家の養子となり、工部大学校（今の東京大学工学部）



へ進学して首席で卒業、その後グラスゴー大学へ留学しました。卒業後の1886年に
ファウラー・ベイカー工務所に就職し、『フォース鉄道橋』の建設に関わることになりました。

スコットランドの東側、エディンバラのすぐ北にはテイ湾とフォース湾が深く切り込んでいて、鉄道網を北へ延長するには、大きな障害となっていました。橋をかけることができなければ、線路を大きく西へ迂回させることになり、工事にかかる時間はもちろん、列車移動の所要時間も大幅なロスをもたらすこととなります。まず、1878年に鉄道技師トマス・パウチ設計による、テイ橋が完成されました。ところが、1年後、横からの強風に対する耐荷力の不足から橋が崩落し、折悪しく、汽車が通過中であつたことから大惨事が起きてしまいました。当時世界一の長さを誇ったテイ橋の完成により、パウチは叙勲され、次の『フォース鉄道橋』の設計に取りかかった矢先でした。もちろん、彼は、フォース鉄道橋の建設計画から外され、間もなく失意のうちに亡くなったそうです。

テイ橋の悲劇を受けて、新しい『フォース鉄道橋』の設計を任されたのが、渡邊嘉一が属していた工務所の共同経営者であつた、ジョン・ファウラーとベンジャミン・ベイカーでした。この橋は、カンチレバー構造という方法で設計されました。私は土木のことは良く分かりませんが、当時、テイ橋の失敗を受けて、

非常に神経質となっていた当局に対して、構造に関する説明会が開かれました。その時に撮影された写真が、渡邊嘉一を真ん中に3人で手をつないで「Human Bridge」を作った姿で、その120年後、お札に採用されたのです。



1890年に完成した『フォース鉄道橋』は全長2,530m。赤く塗装されている姿は、「鋼の恐竜」という異名も持っており、現在もその上を、列車が走り続けています。あまりにも巨大な橋なので、常にどこかの部分が塗装されており、“フォース鉄道橋を塗る (Painting the Forth Bridge)”という言い回しは、「絶対終わらない (そんなにモタモタしているといつまでも終わらないよ)」という意味で使われています。

『エディンバラの旧市街地と新市街地』も世界文化遺産ですので、スコットランドをご旅行なさる機会がありましたら、ぜひ、車で30分ほどのフォース湾へも足を延ばして、「鋼の恐竜」をご覧になってください。

ところで、昨年12月、同じフォース湾にかかる道路橋(1964年建設)に構造上の問題が起き、3週間、補強工事の為に橋が封鎖されました。大型車両は今も通行止めのみで、今月中旬ごろ再オープンの予定です。100年以上前の鉄道橋の方が健在なのですから、やはり、世界遺産に登録されるだけのことはありますね！

最後に、余談ではありますが、大阪フィルハーモニー交響楽団の名指揮者だった朝比奈隆は、渡邊嘉一の実子であると思われています。渡邊嘉一の愛人、小島里との間に生まれ、朝比奈家へ養子に出されたという説が有力です。朝比奈隆が住んでいた神戸市灘区篠原は、私が生まれた町です。父が大のクラシック好きだったこともあり、朝比奈隆の演奏は何度も聴きに行きました。そう言えば、『フォース鉄道橋』を初めて見た時も父と一緒にいました。23年も前のことです。その父が亡くなってから、今年の1月で20年が経ちました。『フォース鉄道橋』の世界遺産登録のおかげで、様々な思い出がよみがえりました。

それでは、また。春ももうすぐそこまで来ています。皆さま、お元気で。